

雨の宮古墳群



石川県

中能登町

なかのとまち



中能登町の概要

中能登町は、能登半島の中央に位置し、輪島市や金沢市、隣県の富山市とは、それぞれ50kmと、おおよそ1時間圏内にあり高速交通体系の整備が着々と進む中、各都市からの立地的な環境が極めて良好な立地条件にあるといえます。

地勢は、邑知地溝帯を中心とする平

風の人・土の人が交わるまちづくり
「教育」「歴史」「観光」が暮らしを紡ぎ能登半島の「住みよいまち」へ

野部と、その両翼を東側に石動山、西側には眉丈山系が連なる丘陵地からなり、国指定史跡の「石動山」、「雨の宮古墳群」のほか、「川田古墳群」など数多くの遺跡を残し、能登文化発祥の地としても広く知られた、豊かな自然と文化遺産に恵まれた地域です。主要な集落は、平野部と丘陵部の境に沿って旧街道沿いに細長く分布しており、日本の原風景とも言つべき景観をかもし出しています。

平成23年6月に、能登半島に広がる「能登の里山・里海」が世界農業遺産に認定されましたが、これは中能登町の農村景観や農村文化、生物の多様性、そして中能登町の暮らしそのものが認められたものです。

中能登町の面積は89.45km²、人口は約1万8千人です。基幹産業は、稲作を中心とした農業と、石川県指定無形文化財「能登上布（のじょうふ）」を起源とした日本でも有数の繊維産地の集積が図られている合繊織物を主産業とし

教育の充実による未来への投資

ており、その技術力並びに生産力では、日本最大級の産地を誇っています。

▼夢プロジェクトの取組

中能登町では、県下一の教育環境を目指して、3校あった中学校を1校に統合するとともに、6校あった小学校を3校に統合しました。

特に、平成25年4月に開校した新生「中能登中学校」では、開校初年度から、学力・スポーツ共に県下でもトップクラスの成績を誇っています。

これは統合を見据えて、「夢プロジェクト」としてソフト事業の強化を図った成果によるものと考えています。

この「夢プロジェクト」は、平成22年度から学校・教育委員会・PTA・体育協会を推進母体として、「県下に名高い中学校を築こう」という願いのもと、学校間の交流活動や、ふるさと検定やふるさと学習、家庭学習の習慣化、新しい伝統としての行事の創造など様々な取り組みを行っています。

平成26年度からは第2期として、高い目標を立てて取り組みを行っており、平成27年4月には、新生「鹿島小学校」が開校、中能登町の学校統合を

終え、教育の充実期を迎えています。

このように中能登町では、町全体で教育環境の向上を目指すとともに、教育の町としての「中能登スタイル」の確立を目指しています。

▼学校支援員の配置

各小中学校には、各教室で学習に向かう際に、支援が必要な児童生徒がいます。

そこで、学習に向かうことが困難な児童生徒や支援が必要な児童生徒に対して、全小中学校に15名の支援員を配置し、一人一人の困り感を解消し、教員が授業を進めやすいようにサポートをしています。



鹿島小学校入学式風景

今後は、特に小学校1年生の学習規律の定着を図るために支援員を増員し、学習の支援の充実を図っていきます。

▼若者が暮らしたくなる地域へ

こつした教育施策の充実により、保護者が安心して子供たちを学校に送り出す環境を整えていることが、これまでに児童生徒の数が一定水準を保っている状況をつくりだしていると考えています。

こつした取組により、若い世帯が中能登町に魅力を感じてもらえる地域となり、定住が促進されている要因の一つでもあります。

更に、若い世帯が新たに中能登町に生活の拠点を移すことを支援していくため、定住奨励金を拡充し、最大100万円を助成するとともに、高校生までの医療費を無料化する乳幼児児童生徒医療費の助成、出産祝金として、第1子10万円、第2子20万円、以降10万円ずつ加算し、第5子以降では50万円を助成しています。

その他にも、子育て世帯への経済的な支援として、チャイルドシートの購入費助成や保育園の第3子無料化に加え、所得制限条件による第2子以降の保育料の無料化、更には、第2子以降の学校給食費の無料化、ひとり親世帯

への支援など、子育て支援制度を大幅に拡充しています。

このような取組が、企業の注目を集め、特に世界最高水準を誇る繊維物業界からの製造業の進出や、関連産業の工場の再開が期待されるなど、雇用面でも活況ある動きが出てきており、若者の「しごと」「暮らし」「子育て」に充実したまちづくりが進んできていると実感しています。

歴史に育まれた風土とまちづくり

「能登はやさしや土までも」

この言葉は、能登人の人情や風土を巧みに言い当てている表現であります。まず「能登」という名前は、当町にある「石動山縁起(せきどうさんえんぎ)」に由来しています。その石動山に元禄9年、加賀藩侍「浅加久敬(あさかひさのり)」が詣でた際に、七曲がりという険しい山道で、馬子に難所はここだけかと聞いたら、杓子(しゃくし)峠という所があると答えたので、「ここよりも、いくすくいほど多からん。杓子峠の道の悪さは。」と独り言のように歌を詠むと、馬子がすべっここより、ふたすくい分ほど多いでしよう。「と返答したそうです。

文学的な要素がないと思いついて

た馬子が歌を解し、しかも、この難所で疲れた様子も見せずに笑顔で的確な答えを返したので、杵歌にもつたわれている「能登はやさしやつちまでも」とは、このことだろうと感慨にふけったと当時の日記にも書かれています。

当時の能登の文化水準の高さや能登人の素晴らしさがこの歌になったとも言われており、こうした土壌が培われた中能登町にあって、古来より北陸地方最大とも言われる古墳群が集積していることから、古墳時代は中能登町が能登の中心であったことが推測され、町を中心に広がる古墳文化が学べる地域



石動山 大宮坊

親王塚古墳風景



域となっています。

特に、国指定史跡「雨の宮古墳群」や、平家物語にも記述されている「親王塚古墳」などが知られています。

また、北陸の霊山としての石動山は、山岳信仰に仏教が結びつき（神仏習合）、仏教徒らによって寺院の形が整えられましたが、南北朝時代と戦国時代の二度にわたり全山焼き討ちの憂き目にあい、今では、草木に埋もれた沢山の礎石や石垣だけが往時を偲ばせ、栄枯盛衰を物語り、歴史の流れに翻弄された地域でもあります。

こうした、数々の歴史文化遺産を後

世に語り継ぐため、地域の住民の皆様方の参画により、それぞれの史跡を「護る会」が結成されるとともに、ボランティアガイドも育成されつつあります。そして、町では史跡の保全に努めるとともに、世界農業遺産「能登の里山・里海」の景観を後世に伝えるため、中能登地域に伝わり、加賀藩の農家の特徴である「東造り（あずまづくり）」と言われる建築様式の古民家を再生し、旧街道と古墳、まちなみの景観を守っています。

バリアフリー観光の推進

歴史文化遺産を患直に守りながら、将来に伝えていくことが大切であると考えていますが、その一方で、こうした史跡にはバリアがたくさんあります。

障がいの数だけバリアがあるとも言われており、障がいや高齢で自由がきかない方の不安を取り除くため、全国統一規格の「パーソナルバリアフリー基準」に基づいた施設のバリア調査を行い、その情報をNPO団体のホームページから伝えています。

「教育のまち」だからこそ、親子二世代や四世代で中能登町の観光施設を安心して訪れていたいただくために、施設を

改修するだけでなく、バリア情報を伝え、あらかじめその情報に基づいて、それぞれが旅を工夫してもらったことが大切であると考えています。

毎年、調査の範囲を広げながらバリアフリー観光を推進しつつ、高齢者にもやさしいまちづくりを推進しているところです。

そして、平成27年8月2日に、町の地場産業である繊維産業の技術をアピールするとともに、バリアフリー観光の推進を広く知ってもらうため、町祭のファッションショーでパラリンピックを目指すアスリート等による「切断ヴィーナスショー」を開催しました。



パラリンピックを目指すアスリート等による「切断ヴィーナスショー」



このことから、中能登町の繊維技術とバリアフリーの取組が、大きな注目を集めることができました。

道の駅「織姫の里なかのと」の情報発信

平成26年4月中旬にオープンした道の駅は、平成27年1月に石川県庁において石川県バリアフリー社会推進賞（施設部門）最優秀賞を受賞しました。

この施設は、高齢化社会に向けた地

域振興施設として、段差や階段となる要素をなくし、すべてをバリアフリーとしたことや、回廊部分にはベンチを組み込んで、歩行弱者用の休憩施設とし、また、車いす利用者が施設内どこでも回転可能な広さとするなど、総合的なバリアフリー化を実現したことが評価されたものです。平日の日中には、老人福祉施設の利用者が福祉車両数台に分かれて訪れるなど、にぎわいある施設となっています。



道の駅「織姫の里なかのと」

中能登上布機織り作業風景



そして、この道の駅は、中能登町の情報を広く発信し、町の魅力を直接感じ取ってもらうための施設であり、観光情報や特産品、農産物の発信拠点として整備しました。

道の駅が完成したことにより、石川県内や富山県からも多くの来客を迎えることができ、平成27年2月末に能越自動車道七尾氷見道路が開通した相乗効果によって、広域的な利用が図られています。また、町民の利用も多く、町の数々のパンフレットに興味を示されるなど、地域住民が中能登町を知るとても良い機会となる効果もありました。

おまわり

中能登町は、平成の大合併を経て町民の「融和」を基本として、これまで様々な融和施策を推進してきました。

特に、中能登町の文化・歴史や産業資源を活かしながら、地域に伝わる「曳山」や「御輿・獅子舞」、地域の基幹産業である合織織物を活かした「ファッションショー」などの地域資源を活かしたイベントの開催とケーブルテレビの整備や、その光ケーブルを活かした町内一円の無料電話の設置、統合小中学校の整備、ほ場整備の推進、道路網整備など、社会資本の整備に重点を置き、町政を進めてきました。

その一方で、福祉施策の充実も図り、バランスの取れたまちづくりが実現できていると高い評価をいただいています。この結果、「住みよいまち」としての評判が、人口減少率が低く抑えられている原因であると考えています。

これからも、中能登町に古くから伝わる歴史文化を大切にしながら、教育や観光を通して、風の人、土の人が交わる住みよいまちを目指していきます。

中能登町長 杉本 栄蔵

（平成27年5月18日付第2919号）

若狭湾国定公園に属する三方五湖（みかたごこ）



福井県

美浜町

み は ま ち ょ う



美浜町の概要

美浜町は、福井県の南西部、いわゆる嶺南地域に位置し、人口10,154人（平成26年4月1日現在）、北は日本海に面し、南は山林が広がり、東は敦賀市、西は若狭町、南は滋賀県高島市に隣接しています。

町の総面積は152.32km²で、東西約19km、南北約27kmと南北に長く、町土の約8割は山林で、町の中央部を流

自然かがやき 人いきいき まちがにぎわう 美し美浜をめざして

れる耳川流域に平野部が広がるとともに、海・山・川・湖という変化に富んだ自然の景観に恵まれており、若狭湾やラムサール条約登録湿地「三方五湖」（美浜町には、久々子湖、日向湖がある）は若狭湾国定公園に指定されています。

このため、基幹産業は豊かな自然を生かした農林水産業と観光産業であり、関西、中京方面を中心に近年は両方の連携による体験教育旅行等都市部との交流が活発です。

また、昭和45年に関西電力美浜発電所一号機が運転を開始して以来、原子力発電所と共に歩んできた40年以上の歴史から、「原子力と共生する町」として、エネルギー・環境問題で先進的な取り組みをおこなっています。

「美し美浜」とは・・・

美浜町では、平成18年度から「第四次美浜町総合振興計画」に基づいて、「自然かがやき 人いきいき 町がに

ぎわつ「美し美浜」を将来像とした積極的なまちづくりを進めています。

町を取り巻く様々な社会情勢の中、美浜を主張する個性的で自立したまちづくりのためには、住民と行政が情報を共有しながら、まちづくりについて学ぶ「共学」が重要であり、それぞれの役割や責任を分担し実行する「協働」が不可欠であると考えています。

「美し美浜」には、美浜の自然がいつでも美しく、食べ物美味しく、そして何よりも「心」を美しく豊かに育んでいきたいという思いが込められています。

この「美し美浜」こそが、全町民の願いであるとともに、成し遂げなければならない目標であると考えています。

「美し美浜」づくりのその1
「へしこ」の町美浜

「へしこ」は若狭地方に伝わる保存食で、美浜町は日本で唯一「へしこの町」を宣言しています。「へしこ」は魚のヌカ漬けで、若狭地方の冬の保存食として伝えられてきました。

古くから美味な鯖の好漁場で知られる若狭湾に面した美浜町は、とりわけ「鯖のへしこ」作りが盛んです。美浜のへしこは、鯖を漬け込むヌカと塩以外に醤油や酒、みりんなど独自の調味料

保存食として古くから若狭地方に伝わる町の特産品「へしこ」



を使用するところが特徴で、お惣菜にも酒の肴にもなる「美浜の旨いもん」として全国にファンがいます。

美浜町は地域が誇るこの伝統食を守り伝えるとともに、地域の活性化や観光PR、名物料理の研究・開発などに活用していくため、平成17年に「へしこの町」を宣言し、商標登録をしました。現在、さまざまな団体や企業が秘伝の味のへしこを作っています。その他にも「へしこラーメン」や「へしこパスタ」などの新メニューの開発や、町内の小学校でのへしこ作りの体験学習、観光体験プログラムにへしこ料理

作りを取り入れるなど、へしこを生かしたまちおこしに取り組んでいます。

「美し美浜」づくりのその2
若狭美浜はあどむる体験

農業や漁業等の町の産業者が生業や経験を生かし、美浜町の自然や産業、文化、食を体験できる体験教育を推進するため、平成16年に、「若狭美浜はあどむる体験推進協議会」を発足させました。

体験コーディネート業務は、NPO法人はあどむる美浜ネットワークが携わり、現在、農林漁業体験、味覚体験、自然・アウトドア体験、工芸・歴史文化体験など75種類以上のプログラム



大敷網漁船に乗って若狭湾で漁業体験

久々子湖でのボート体験



が用意されています。

例えば、「へしこの町」美浜ならではの「へしこ料理体験」、「ボートの町」美浜ならではの久々子湖での「ボート体験」、若狭湾で大敷網の漁船に乗っての「漁業体験」や農家・漁家での民泊、森での間伐のプログラムなど美浜らしさが詰まっている内容となっています。普通の観光旅行では体験できない美浜の魅力にふれることができることから、毎年、修学旅行に訪れ美浜町で3日間を過ごす学校もあり、地元の人と交流しながら美浜町の自然・文化・歴史にふれる体験型ツーリズムとして定着してきています。

「美しい浜」づくり その3
 ～海と湖を感じながら
 スポーツを楽しめる～



五木ひろしマラソン

湖風を受け、健脚を競つ「美浜・五木ひろしまラソン」は、平成元年から開催されており、美浜町出身で名誉町民でもある歌手の五木ひろしさんを招いて行われる一大スポーツイベントです。

風光明媚な若狭湾国定公園の海岸線を走る日本陸連公認のマラソンコースはランナーの人気も高く、町内はもちろん北は北海道から南は九州まで全国各地から市民ランナーたちが参加します。毎回、著名人のゲストランナーが参加し、大会を盛り上げるのもこの大会の特色です。

スタートの号砲とともにコースに飛び出したランナーたちは、肌をなでる湖風を感じながら海岸線を快走し、心地よい汗を流します。

美浜町は「ボートの町」です。毎年秋に開催される「町民レガッタ」は、

湖上で繰り広げられる熱い戦いです。町民が三万五湖の自然とボート競技に親しむことを願って昭和63年にスタートした大会で、いまや恒例行事としてすっかり町に定着しています。

平成18年からは町

町民レガッタは誰にでも気軽に湖やボートを楽しんでもらうことを目的に開催



外の参加者のための「交流の部」が設けられ、本年も町内外から265クルーが、会場となる県立久々子湖畔コースで熱戦を繰り広げました。観客も大勢つめかけ、クルーたちに声援を送りながら、湖岸の秋を満喫します。

尚、平成30年に開催される「福井しあわせ元気国体」の「ボート競技」「軟式野球競技」の会場ともなっており、特に今後は、ボートコースや周辺の整備と併せ、「ボートの聖地美浜町」として全国に発信していきたいと考えています。

「美しい浜」づくり その4
 ～生涯学習のまち 美浜町～

美浜町は、平成16年に町制50周年を記念して「生涯学習のまち」を宣言しました。平成24年には生涯学習活動の拠点として整備した、学びの「なび」と明日の「あす」私達のあす(AS)から名付けた生涯学習センター「なびあす」を整備し、ここを拠点に、各種生涯学習講座、高齢者対象のはあとふる大学、生涯学習まちづくり出前講座など学習機会も豊富で、若者から高齢者まで幅広い年齢の町民が、楽しく心豊かに学んでいます。

また、「なびあす」には幻のピアノと呼ばれるイタリアのファツィオリ社製



世界最高水準ファツィオリ社のコンサートグランドピアノ

F3008を日本国内のホールで初めて導入しました。世界最高水準で奥行きが3mを超える最大級のコンサートグランドピアノです。重厚な音量とクリアな音色を体感でき、大迫力のパワーと長くなった低音域の弦から生まれる倍音は、全世界から称賛を得ています。

このファツイオリ社製ピアノが縁となり、世界的なピアノコンクールであるルービンシュタイン国際ピアノコンクールの入賞者を招いたガラコンサートの招聘が決まりました。「なびあすにしかない価値」を全国に広く発信する機会ととらえております。

「美しい浜」づくり その5
くだれもが健康で安心して暮らせるまちづくり「げんげん運動」「よまごころ活動」

美浜町では、町民の健康づくりのため、町ぐるみで減塩・減量に取り組む「げんげん運動」、町民全体が認知症に対する理解を深め、誰もが認知症になっても安心して暮らせるまちづくり「よまごころ活動」を進めています。

本年4月には、美浜町を舞台にした、さだまさし氏の小説「サクラサク」が映画化され、全国で一斉公開されます。



町をあげての食生活からはじめる健康づくり
げんげん運動

した。都会に住む崩壊寸前の家族が、認知症の症状が出始めた祖父の思い出の地を訪ねながら家族の絆を取り戻していく内容となっております。壊れたものを元に戻すのではなく、より大きく強い『絆』で結ばれてこそ「本当の再生」になるといふ家族の絆(愛)を美浜町の自然と風景が織りなす映像美の中で見事に描き出されています。

(映画のDVDも発売されていますので是非一度ご覧いただきたいと思っております。)

「美しい浜」づくり その6
先進のエネルギー環境教育

美浜町は「原子力と共生する町」として、エネルギー環境教育に町を上げて取り組んでいます。町内小中学校では、児童・生徒のエネルギーや環境への関心と理解を深めるために、日本初となる小中一貫のエネルギー環境教育カリキュラムを策定し、原子力関連施設の見学や電気・自然エネルギーに関する体験学習などを授業に取り入れながら、段階的・総合的な教育を進めています。

この拠点として、平成27年度には、再編により廃校となる小学校の校舎を活用した「エネルギー環境教育体験施設」の整備を行います。



エネルギー環境教育体験施設(完成予想図)



砂粒が細かくきらめく白い砂が特長の水晶浜

「美しい浜」づくり その7
今後に向けて

本年美浜町は、町制施行60周年を迎えました。少子高齢化による人口減少の問題等多くの自治体が抱えている問題に加え、東日本大震災以降長引く原子力発電所の運転停止に伴う地元経済の疲弊問題等にも直面しているのも事実です。

しかしながら、本年7月に舞鶴若狭自動車道が全線開通し、本町へのアクセスの利便性が格段に向上しましたので、これを絶好の機会と捉え、交流人口の拡大と定住促進を強く推し進めていきたいと考えています。

美浜町長 山口 治太郎

(平成26年12月22日付第2903号)

町村独自のまちづくり施策

上空より「海と山に囲まれた自然豊かな」坂町を臨む



広島県

坂 町
さ か ち ょ う



坂町の概要

坂町は、広島県の南西部、安芸郡の南に位置し、中四国地方の中心都市である広島市と隣接しています。人口は約13,000人で、高齢化率は29.4%です。町内にはJR呉線の駅が3つあり、広島呉道路や広島南道路などの幹線道路網も整備され、広島市や呉市の中心部まで、鉄道や車で約20分と

いう交通便利性の高い町です。

町域面積は15.69km²で、そのうち約50%が山林で占められており、町の周囲は約7.1kmの海岸線及び山林で囲まれています。海・山といった恵まれた自然環境の中で、生活圏がコンパクトに形成されており、緑豊かな山々と美しい広島湾の風景が広がっています。

昭和40年代以降から行われてきた埋立て事業である広島東部流通団地建設事業や、広島港坂地区開発事業は、流通団地や学校、総合スーパー、郊外型商業施設、さらには宅地開発を促進し、坂町を大きく発展させ、広島都市圏東部の新拠点として、期待を集めています。

三位一体の防災対策

坂町では、道路・河川・海岸整備などの三位一体の防災対策を実施し、安全・安心なまちづくりに取り組んでいます。

親から子へ、子から孫へと歴史・文化・地域を守っていくことのできるまちづくり

▼道路整備

国道31号とJR呉線により分断された新市街地と旧市街地を結ぶ県道坂小屋浦線は、現在、広島県により整備が進められています。

均衡ある地域の発展、防災機能の向上、民生の安定など、将来のまちづくりに必要不可欠な道路であり、早期完成に向け、町においても、その整備推進に取り組んでいます。

また、この県道を軸にアクセスする生活道路を段階的に整備し、ネットワーク化を図っています。

▼海岸整備

坂町の沿岸部では、平成3年の台風19号、平成11年の台風18号、また、平成16年の台風18号の高波や高潮の越波により、多くの家屋が床上・床下浸水などの甚大な被害を受けてきました。

このような状況から、安全・安心なまちづくりのため、平成19年から県営事業として既設護岸の高上げと海岸に離岸堤4基（1基50m）の建設が進められ、平成27年度に完了しました。

▼町内全域で避難訓練を実施

近年、大規模災害が各地で発生しています。災害を事前に予測することは難しく、状況に応じて一人ひとりが判

建設された3基の離岸堤



▼防災とスポーツ・文化活動の新しい拠点の誕生

平成26年9月に、防災とスポーツ・文化活動の新しい拠点として、Sunstar Hall(サンスターホール)が誕生しました。この施設の命名権は、日用品メーカー「サンスター」の創業者が当町出身という縁でご購入いただいたものです。

○防災拠点：災害時には、備蓄倉庫も備わった地域住民の避難場所となります。平成27年度から、国のニューディール基金を活用し、太陽光発電及び蓄電池を整備しています。



平成26年9月、防災とスポーツ・文化活動の新しい拠点「サンスターホール」が誕生

○文化施設：コンサートなどを開催できるステージや1010席の電動式移動観覧席を備えています。
○体育施設：バレーボールの公式試合などを開催できるアリーナや200席の観戦席を備えています。

伝承文化

坂町には、秋祭りで奉納される曳船、頂載、屋台、獅子舞をはじめ、雅楽、亥の子神楽など、多くの伝統文化が、現在も町民の生活の中に息づいています。



坂町指定無形文化財に指定されている「坂雅正会」

また、多くの神社・仏閣が各地域に点在し、それらは現在も、大切にそれぞれの地域の人々によって守られています。

坂町では、約120年の歴史を持つ雅楽団体「坂雅正会」を坂町指定無形文化財に指定し、その活動を支援するなど、伝統文化の継承に努めています。

子育てにやさしいまち

坂町は、可住地面積が少ないことから、若い世代の転出が課題となっていました。そこで、次世代を担う若者の定住促進を図るために、子育て支援住宅を整備しました。この住宅は保育園・子育て支援センターを併設しています。保育園は、一時保育・延長保育を実施しており、働きながら子育てをしている世帯に大変喜ばれています。

また、平成26年に子育て世代がふれあい、交流できるスペースとなることを目的として「きらり・さかなぎさ公園」を整備しました。ロープ遊具や全天候型遊具を備えており、週末になるとたくさん子どもたちの明るい笑い声があふれています。

子育て世代がふれあい、交流できる「きらり・さかなぎさ公園」



観光・レクリエーションの振興

坂町では、平成22年8月に町制施行60周年を記念し、ウォーキングを通じて健康でたくましく「こころ」と「からだ」をつくり、悠々(ゆうゆう)とした心豊かな生活を目指し、「悠々健康ウォーキングのまち」を宣言しました。町内に点在する歴史的・文化的資源を有機的につなぐウォーキングコースを町内全域に整備しており、町内に3つあるJRの駅ともリンクしている

坂町悠々健康ウォーキング大会



ため、町外の方もウォーキングを楽しむに坂町へ訪れています。このウォーキングコースを利用し、毎月1回産学官連携によるウォーキングイベントを開催しています。

また、平成24年から、毎年3月に「坂町悠々健康ウォーキング大会」を開催しており、町内外から1,200人前後の人が参加しています。コースは、坂町の緑豊かな自然や潮の香り、島影の美しい広島湾の風景を満喫できるように設定しています。2kmのコー

スは、幼児から高齢者まで幅広い年齢層でウォーキングが楽しめる平坦なコース、5kmのコースは、町内の町並みや公園などを散策できます。そして、海・まち・山・空を望み、健康増進、自然体験、心のリフレッシュができる10kmのタフな山間コースの3コースから選択してウォーキングを楽しむことができます。歩いた後は、坂町の特産品である牡蠣を使用した力キ雑炊をふるまっており、美味しいと好評です。

そして、平成27年で25回目を迎えた「広島ベイマラソン大会」は、潮の香りを楽しみながら走れる海岸線のコースで、毎年1,500人を超えるランナーが、県内外から参加しており、町を代表するイベントとなっています。

坂町には、広島県が整備した全区間1,200mの西日本最大級の人工海浜である海水浴場、ベイサイドビーチ坂があります。広島市内から一番近い海水浴場で、駐車場も砂浜の目の前にあり、海水浴だけではなく、ビーチバレーボール、ウインドサーフィンなどを楽しむ方もいらっしゃいます。屋外シャワー、更衣室も完備しており、快適なシーサイドリゾートを楽しむことができます。

西日本最大級の人工海浜
「バイサイドビーチ坂」



教育の充実

子どもから大人まで、町民一人ひとりが学ぶ意欲と生きがいをもった生活が実現できるよう教育施策に力を入れています。

坂町では、「礼節」を重んじた教育を推進し、人と人とのつながりを大切に、家庭・学校・地域が一体となって取り組むことができるよう努めています。

学校教育においては、坂町の将来を担う子ども一人ひとりが大切な何かを成し遂げようとするために志を立て、強い精神力をもって努力し、将来、「自立した社会人」として活躍できるような人づくりを目指しています。そのため「知・徳・体」の調和のとれた人間の育成に努め、9年間を見通した小中連携を展開しています。

「知」の部分に関しては、毎年の学力テストの結果を受け、各校ごとに改善計画を立て、分析・授業改善等の取り組みを行い、弱点の改善に努めています。また、テレビを見ない、ゲームをしない期間を設けるなど、保護者の協力を呼びかけながら、学習時間の確保、内容の充実を図っています。

こうした取組みを通して、応用力、活用力についても、一定の定着が見られ学力の向上が図られてきています。

「徳」の部分に関しては、社会の秩序維持に必要とされる礼儀、節度などの失われつつある日本の古き良き礼節を重んじ、基本的な規範意識、美しいものや自然に感動する心、公共心や他者を思いやる心などの道徳心の高揚に取り組んでいます。

また、「体」の部分においては、体育

専門の教諭をリーダーとし、町内全ての小学生の体力向上を図ることも、教職員の指導力向上にも努めています。中学校では、部活動を支援するため、必要に応じてコーチを配置し、生徒の体力・技能の向上を図り、活躍を支えています。

町内唯一の中学校である坂中学校では、陸上競技部が男女ともに全国大会への出場を経験し、平成27年2月には、第29回福岡国際クロスカントリー



力強く、強い絆でタスキをつないだ
「坂中学校男子陸上競技部」

大会中学駅伝男子の部において優勝するなど、坂町の子どもたちは、「体」の部分についても力強く育まれています。

おわりに

全国的に少子高齢化や人口減少が進展する中で、坂町においては、新市街地である平成ヶ浜地区で若者世代の定住により人口が増加しているものの、その他の多くの地区では高齢化や人口減少が進んでおり、地域間の格差が生じています。

町の課題である地域間格差を是正し、均衡ある地域の発展を図り、安全・安心に暮らせるまちにするため、三位一体の防災対策、歴史・文化の継承、子育てと教育環境の充実、そして、地域資源を活用した賑わい創出に取り組み、「親から子へ、子から孫へと歴史・文化・地域を守っていくことができるまち」の実現を目指し、町民一人ひとりが誇りの持てるまちを創造していきたいと考えています。

坂町長 吉田 隆行

(平成27年12月21日付第2944号)

町制施行60周年

一歩上を目指したまちづくり

成熟

そして未来へ向けて



親水公園「ひよこたん池公園」

愛媛県

松前町

ま さ き ち ょ う



おひめじ

松前町は、一級河川の重信川を境にして県都松山市に隣接する、人口3万人余の町です。道後平野の西南部に位置しており、西は伊予灘に面し、南は伊予市を隔て四国山脈が望める豊かな自然環境に恵まれたところです。

町内を歩けば、豊富な水辺環境を生かした親水公園をはじめ、春には黄金

色に輝く麦畑が、夏には町花であるひまわりが一面に広がり、見る人の心を癒します。その一方で、炭素繊維の先端工業施設や大型商業施設も立地しており、豊かな自然を残しながら、近代的に発展している町です。

本町は、県内で一番小さく、車で30分もあれば町内を一周できるコンパクトな町ですが、「水きらめき 笑顔あふれる ライフタウン・まさき」のコンセプトのもと、豊富な水と肥沃な土地を生かした農業をはじめ、「笑顔でいきいきと住み、働き、学び、憩い、楽しむことができる」一歩上を目指したまちづくりに取り組んでいます。

こうして、先人たちの努力によって繁栄してきた松前町は、平成27年3月に町制60周年を迎えました。

60年は人生に例えると還暦にあたり、第二の人生への新たな出発を意味しています。この記念すべき節目の年を住民のみなさんと共にお祝いして、

松前町の更なる発展につなげていきたいと考えています。

災害に強い町づくりを 目指して

平成24年4月に新たに設置された防災担当副町長を委員長として、役場の各課長と消防署長を委員とする松前町防災対策プロジェクトチーム（以下「PT」）を立ち上げました。

PTは、東日本大震災を教訓とした防災対策の充実強化のために発足。近い将来、南海トラフで発生することが予測される巨大地震について、町民の安全・安心を確保するため、役場の危機管理体制、避難対策、津波・液状化対策などについて検討しています。

まず、「課題検討班」を設立し、防災上の課題の洗い出し作業を実施。引き続き、抽出した課題の対策を検討する「課題対策班」の活動を同年5月にスタートさせました。さらに、具体的な課題対策を検討するにあたり、下部組織として担当者で構成するワーキンググループを設置。121項目の課題に対する対策を取りまとめました。

そして、同年9月には、住民、企業、有識者と行政が防災対策について話し

松前町災害に強いまちをつくる会



合う「松前町災害に強いまちをつくる会」で、本町の実情に合った防災・減災への取り組みについて検討。現在も、回会で協議された結果をもとに、計画的に防災・減災対策に取り組んでいます。

平成25年4月には、各種対策のさらなる推進のために「対策推進班」を設置し、防災マニュアルの作成やBCP（事業継続計画）に基づく職員体制の整備をはじめ、その検証のための演習や訓練などを計画的に実施しています。

今後は、引き続き公助の充実を図りながら、自助と共助の機能強化を行う

ため、自助については、更なる意識啓発を、共助については、その要となる自主防災組織の更なる活性化を図ります。三者の連携による相乗効果により、「災害による被害を最小限度に抑え、災害に強いまちづくりのため、官民一体となって災害への準備を行います。」

ひまわり畑からエネルギーを バイオマスプロジェクトへ

松前町では、えひめバイオマスプロジェクトのモデル町として、町花であるひまわりを栽培し、種から油を採り燃料などに活用するバイオマス推進事業を実施しています。その中で、CO₂の発生を抑え、地球温暖化防止と農地保全を図り、美しい景観を守ることを目指しています。

ひまわりは町内2カ所で栽培し、収穫された種の油を町内保育所の給食や地区行事に使用。そこから出た廃食油をバイオディーゼル燃料に活用しています。平成25年度は、約10反の畑から1,760kgの種を収穫。144ℓの油が採れました。

また、家庭から出る剪定枝を資源ゴミとして分別収集し、廃棄物系バイオマスとして利活用しています。収集

後、町内の農業生産法人に搬入し、処理施設で微生物の力で醗酵。堆肥として町内の農地で再利用しています。平成25年度は剪定枝739tを回収し、505tを堆肥化しました。

松前町子ども環境学園

学年や校区を超えて仲間と協力し、町内の環境を学ぶ「松前町子ども環境学園」。平成24年度から始まった本学園を通じ、ごみの分別や減量について、家庭や地域のリーダーとなる人材を育てています。



環境学園「5R探検隊」の様子

また、環境に関するかるた大会や家庭のごみ調査、ごみの分別に関するクイズの作成、さらに、町内でごみの減量やリサイクルに取り組む店舗や団体などの情報をマップにするなど、町のごみや環境について学んでいます。

さらに、「5R探検隊」と題し、町内から出るごみの量やリサイクルについて学ぶため、会社や工場を見学。同学園に参加していない子どもや保護者も合わせこれまでに157人が参加し、ごみの行方を間近で見ることによって、環境への意識を高めています。

- ※5R
- Reduce (ゴミを減らす)
 - Reuse (再利用)
 - Recycle (再び資源として利用する)
 - Refuse (不要なものは買わない)
 - Repair (修理)して長く使う(続ける)

生産量日本一まさきの珍珠

瀬戸内海の豊富な漁場に面した当町は、ちりめんやいりこなどを使った小魚珍珠の生産が盛んです。現在、その加工生産量は日本一。全国シェアの大半を占めています。近年では、味付き

のいりこが売り出されるなど、小さな子どもから大人まで親しんでもらえるように、さまざまな種類の商品が販売されています。

知名度向上に向けた取り組み

「まつまえちよっ?」県外で名刺を差し出すとほとんど「まさきちよっ?」とは読んでもらえません。

県都松山市に隣接し交通の便も良く、炭素繊維の先端工業施設や大型商業施設が立地している環境の中で、ベッドタウンとしても発展してきた松前町ですが、あまり積極的なPR活動を行ってこなかったため、知名度は低く、まちのイメージが希薄であるなど、情報発信力に欠けている状態でした。



恵み、めぐるまち、まさき。

松前町のロゴマーク

その中で、初めて県外で単独物産展を開催するとうい機会に恵まれ、県外の人に読みにくい町名を分かりやすく伝えるために生まれたのが「ロゴマーク」です。

名古屋での物産展の様子



が足を止めました。その後も、各地の物産展などに積極的に参加し、統一されたレイアウトのブースは、来場者の注目を浴びています。今では、職員が名刺に印刷したり、ロゴマークの入ったポロシャツを着用したりするほか、各種グッズの作製もしています。また、使用許可を得た業者が商品パッケージとして活用するなど、官民一体となってまちのPRに取り組んでいます。

ユニークな交通安全ポスターが大人気

平成20年4月に中四国一の規模を誇る大型商業施設が outlet して以来、町外から松前を訪れる車が大幅に増え、町内における交通事情は大きく変化しました。特に、徒歩や自転車に乗った高齢者や児童・生徒に対する安全の確保が課題となりました。そこで、地域住民と関係団体等が知恵を出し合っ、交通弱者に配慮した、誰もが安心して暮らせる安全なまちづくりを目指し、とてもユニークなオリジナルポスターを3種類作成しました。

高齢者用のポスターは、我が身を犠牲にして後世に麦種を残した町の偉人

平仮名で「まさき」という文字が入った三つの円は、1955年に3つのまちが合併してできた町であることを表し、それぞれの色は、町の特徴である「芽吹きの麦と季節の緑」の緑、「豊かな水と恵みの海」の青、「実りの麦と町花ひまわり」の黄色となっています。物産展ではこのロゴマークを使用したのれんや腰巻などでレイアウトを行い、全ての商品にもロゴシールを貼って販売。インパクト抜群のブースには「まさきちよっ?」と、多くのお客さん

「義農作兵衛」に町長自らが扮し、頭の上に桶を乗せて魚の行商をする女性

「おたたさん」に住民のみなさんが扮して、交通におけるヒヤッと感を表現しました。

町の象徴をモデルにし、おたたまげ〜(びっくりした)という方言が親しみを増して、交通安全への関心がとても高くなっています。

大人用のポスターは、日本一の生産量を誇り、酒のツマミとしても親しまれている本町特産の小魚珍味を囲み、宴会をしている様子を撮影しました。珍味はうまいが のんだら のられん(飲酒をしたら乗るな)という会話風に仕上げたことにより、明るくいき

交通安全ポスター(大人用)



やかなイメージの中で飲酒運転をしないように訴えています。

子ども用のポスターは、当町の夏の風物詩、はんぎり競漕です。はんぎり競漕とは、「はんぎり桶」に乗って、海上を体一つで漕ぎ進みその速さを競うイベントです。

交通安全ポスター(子ども用)



スターを見る人の心をつかみます。

住民のみなさんが企画・出演した斬新でユニークなポスターは、町内のみにとどまらず、町外からの人気も非常に高く、各種施設や店舗など、様々な方面から引張りだこで、増刷して啓発に努めています。

今後の課題

本町は、交通の利便性が良く、地下水も豊富であることから、産業を行うにも、居住して生活するにも恵まれており、子どもから高齢者の方まで町内で衣食住が完結する「ライフタウン」であります。

今年、町制施行60周年を迎えた事を契機に、本町の特性・資源を最大限に生かし、生活から健康・福祉・教育・文化、産業に至るまで、すべての環境のさらなるレベルアップを進め、未来に向けて全国に誇りうるまちづくりを進めます。

今後も、高齢者の皆さんが安心して暮らし、子どもたちがこの町をふるさととして大事に思い、町民の皆さんがいつまでも愛し続けてくれる、そんな「水きらめき笑顔あふれるライフタウン」を目指して、町民の皆さんと共に歩んで参りたいと思っています。

松前町長 白石 勝也

(平成27年1月12日付第2904号)

交通安全ポスター(高齢者用)



なまなざしが、ポ

はんぎり競漕で

はスピードを競っ

ても、自動車・自

転車は安全運転。子どもたちの真剣

避暑地としてにぎわいを見せる立神峡



熊本県
氷川町
ひ かわ ちょう



氷川町の沿革

氷川町は、熊本県のほぼ中央、熊本市から南へ約30km、八代地域の北部に位置する人口約1万2600人、世帯数約4500世帯、総面積33・3km²の町です。町の中央部を東から西へ2級河川「氷川」が流れ、南北に走る国道3号を境に、東に山林・丘陵地帯、西には「西の八郎潟」として全国に名を馳せる「不知火干拓」をはじめとした平坦地が広がっています。

「おかえりなさい」の
声が聞こえるまちを目指して

氷川町の歴史は約1万年前までさかのぼります。そして5千年ほど前、縄文時代の終わり頃には、たくさんの貝塚が作られました。その中の一つ「大野貝塚」では、近代考古学の父と呼ばれるエドワード・モースによって調査が行われました。これは、九州における近代考古学の始まりでもあります。

そして、古墳時代になると、国道3号線から東の丘陵地帯にたくさん古墳が造られます。特に国指定史跡野津古墳群（6世紀初頭〜中頃）と同大野窟古墳（6世紀後半）が著名です。野津古墳群は、姫ノ城古墳・中ノ城古墳・物見櫓古墳・端ノ城古墳の前方後円墳4基からなる古墳群で、墳長60〜100mもあり、この時期大きな古墳が密集して存在するのはとても珍しいことです。また大野窟古墳は墳長123mの前方後円墳で、県内で最も大きいものです。これらの古墳は、その当時「火の国」を治めた「火の君」あるいはその一族の墳墓と考えられています。「火の国」とは現在の熊本県のことです。「肥後国風土記」や「日本書紀」では氷川流域の邑とされており、現在

の氷川町に当たります。つまり氷川町は「火の国」発祥の地であり、しかもその勢力は全盛期には佐賀県・長崎県（肥前国）まで及びました。

「おかえりなさい」の声 聞こえるまち

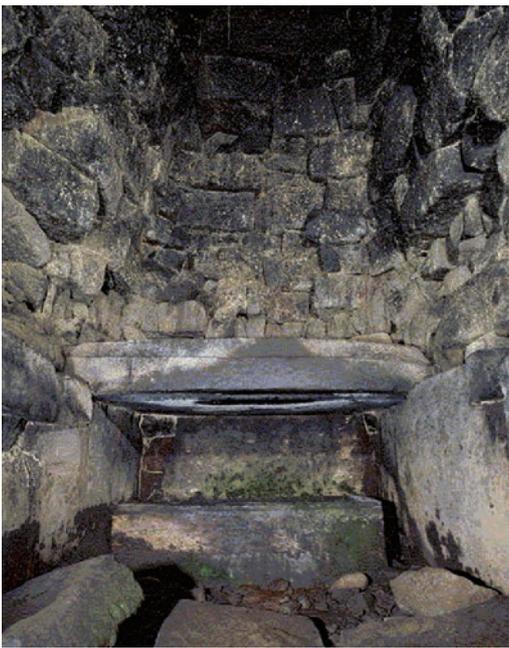
氷川町は、「おかえりなさい」の声が聞こえるまち』を将来像として掲げています。

○日々普通の、そしてとても貴重な、安心して暮らせるまち

○顔見知りの人たちが住む地域社会のなかで、顔見知りの行政の人たちと一緒に暮らせるまち

○安心して食べられるものを生産し、それを味わって暮らせるまち

○地元で働き、地域の環境を守り育み、豊かに暮らせるまち



大野窟古墳の石室（玄室）に納められた石棺。玄室の高さは国内最高の6・5mに達します。



賑わいを見せる「道の駅 竜北物産館」

守られていきいきと暮らせるまち
○すべての町民の、顔と顔が向き合
い、手と手を結び合
い、心と心が
通い合うまち

○このよつなまちは、訪れる町外の人にとつても心地よいまち

そして、自然に「おかえりなさい」の声が聞こえ、広がってゆくまちを目指しています。

地場産業を興 つなぐ まちづくり

恵まれた気象条件と肥沃な土地を活かした農業は、本町の基幹産業です。

農業基盤の整備や高付加価値型の農産品振興をはじめ、様々な農業経営強化の施策を推進してきました。

しかしながら、平成17年度以降、2ha以上の経営耕地面積を持つ農家数が

減少に転じており、大規模集約化が急務となっております。組織化や設備の充実を進めると同時に、青年農業者担い手塾事業として青年農業者の農業経営能力向上を図るとともに、パートナーを得るための交流会を実施しています。

また、農産物の販路拡大のために、道の駅・竜北物産館では出荷協議会の皆さんの農産品や加工品が所狭しと出荷され繁盛しています。

一方では、ジャンボ梨で有名な「新高梨」を平成16年度から台湾に出荷し、価格の安定と国際競争力の向上と地域農業の活性化を図っています。

また、九州新幹線の全線開通に合わせ熊本駅構内にアンテナショップを開設し、氷川町の魅力を発信し認知度を高めることに努めています。

一人でも安心して暮らせる まちづくり

平成24年3月に策定した高齢者福祉計画及び障がい者福祉計画に基づいて、各種サービスの充実と地域で福祉を支えるための組織・人材づくりと活動の支援を進めています。

また、自分の健康は自分で守るといつ、町民一人ひとりの健康づくりへの意識の向上を支援していかんとともに、きめ細かい健康診断に基づき保健指導、予防活動を主眼とした健康づくり活動を推進しています。

子どもを見守り 鍛えるまちづくり

家庭での子育て支援のフレママ・パパ教育、地域での子育て支援の児童医療費助成事業（中学校3年生までの現物給付）、産前産後ホームヘルプ事業などの家庭教育力向上や地域の環境作り事業を推進しています。

また、「ふるさとの大地に輝く氷川っ子」は本町が目指す子ども像です。

学校教育に保護者（家庭）や地域の皆さんが参画した「地域とともにある学校」づくりを進めています。

町内の5校（小学校3・中学校2）全てに学校運営協議会を設置し、地域住民、保護者、行政職員等の推進委員が学校運営に直接意見を反映させる「ミニミニティ・スクール」を推進しています。

環境を守る暮らしのある
まちづくり

本町の魅力である森から里山、田園、海へと連続する多様な地形と、ここでの農地や山林などの自然環境は、町域の約65%を占めています。

しかし、それらの地域は、現状では農地法に基づく農業振興地域の農用地指定により保全されていますが、それ

を今後どのように適切に守っていくかが大きな課題です。

特に、農地や里山にあつては、農業経営上の問題から荒廃地が増え、景観的にも大きな問題です。緑と土に囲まれた豊かな環境の創造や、本町のシンボル清流「氷川」は暮らしを支え、農業を支え、大地を潤しており、いのちの源としての水環境の充実は欠かせないものです。



環境学習の拠点「立神峡公園」

ここで、立神峡公園をご紹介します。

立神峡公園は、昭和42年9月に五木五家荘県立自然公園の指定を受け、昭和56年から整備を行ってきました。

遊歩道を整備し、その遊歩道に沿って羅漢像127体を設置しました。平成2年には吊り橋「龍神橋」を架設し、平成5年にはログハウス3棟と2基目の吊り橋「火の国橋」を架設。これによって回遊できる遊歩道が完成しました。

平成9年に環境庁より地域環境行政推進モデル事業



昭和30年代の農家住宅をイメージした「里地屋敷」

の指定を受け、里地等環境基本総合推進モデル事業に着手しました。「里地屋敷」は昭和30年代の農家住宅をイメージして建設しました。土間、囲炉裏、かまど、五右衛門風呂など里山の自然資源を循環利用する生活を体験できる施設です。

その他、公園内には研修室、キャンプ場のほか、環境学習、体験学習用の水田、畑、果樹園、竹林、里山林もあり、炭焼き窯も設置しています。

平成16年には環境省の里地里山保全モデル事業が全国4力所で実施されましたが、その中で熊本県南部地区として指定を受け、里地公園及び里地屋敷を中心に平成20年度まで実施しました。公園の管理運営は平成18年9月に管理委託から指定管理者制度に切り替え

ましたが、現在まで立神峡公園管理組合が継続して管理しています。

管理組合には自然体験学習指導者の資格を持つ環境教育指導員がおり、以下のような環境プログラムを企画運営しています。

☆里山暮らしの学校

- 里山の手入れ（落ち葉かき、たい肥作り、蔓切りなど）
- 花炭体験
- スタードーム作り
- 料理体験（石窯シザ、棒巻きパン、竹の子や椎茸料理、季節のジャムづくりなど）
- 竹の子掘り体験



「囲炉裏」かまどなどガスを使用しない生活を体験することができます。

田んぼの学校「代かき」を体験する小学生



○椎茸の「コマ打ち体験

☆田んぼの学校

○田んぼ観察、粉時き、代かき、苗取り、田植え、草取り、案山子づくり、稲刈り、脱穀など

☆宿泊通学合宿

○新割り、かまごでの炊事、五右衛門風呂での入浴、宿泊、里地散策と観測など

☆里山フェスタ

○シシ(猪)汁作り、森の文化祭、コンサート、薪ストーブ、チェンソーアートなど

次世代へ里地里山の生活文化や知恵を継承するため

里地公園の整備とともに生まれた団体「里山クラブどんごろす」は、地域

内外の住民で構成されており、公園を中心としたフィールドで、里山における生活の伝承と知恵の継承を目指して活動しています。

竹林や遊歩道の整備、炭焼き、椎茸栽培などの利用と管理の手法を中心とする体験学習と生物の生息地としての里山の役割や食文化を学ぶ環境教育を立神峡公園管理組合と連携して行うとともに里地里山の再生・復活と里山暮らしを体験しながら、その生活文化や技を次世代へ継承していくための活動を行っています。

この地域でかつて行われていた里山の暮らしは、持続可能な循環型社会づくりへ向けて多くのことを教えてくれます。



宿泊通学「新割り」を体験

また、平成22年にオープンした竜北公園は、隣接する道の駅やウォーキングセンターと有機的に連携し、ひかわツーリズム(周遊滞在型交流)の活動拠点となる環境ふれあい型の公園です。

自然と共生する里山の暮らしの中で育まれた伝統・文化や知恵を体験する環境学習は地域の環境保全活動へと波及しています。

先進の住民自治による地域づくり

総合振興計画における地区別計画は、住民の身近な地区における住民主役のまちづくりを進める基礎となるもので、自分たちでできることは自分たちで取り組むことを基本に、行政の支援を受けつつ、地区のまちづくりを進めていくための計画です。

この計画は39の行政区それぞれに10名程度の委員で地区づくり委員会を組織し、その委員会に町職員全員をまちづくり担当職員として分かれて配置し、地区の現状把握から目指す将来像を導き出したものです。

平成25年はこの計画が5年目を迎えましたので、10年計画の中間点として計画の見直しを行いました。

それぞれに取り組んできた事業を洗い直し、事業完了、継続発展、新たな事業追加など今に即応した計画を作り直したところです。

計画した事業は、

地区づくり会議の様子



「住民が中心となって取り組むもの」「行政が中心となって取り組むもの」「住民と行政が協働で取り組むもの」と役割分担し、早期に取り組む重点的取組も定めています。

おわりに

小さな合併を選択してから約10年。氷川町は新たなステージへとその歩みが続けています。

協働型社会の実現を基本方針に、町民と行政が手を取り合い、自然に「おかげりなさい」の声が聞こえ、その輪が広がっていくまちを目指しています。

氷川町長 藤本 一臣

(平成26年10月20日付第289号)

琉球王国のグスク及び関連遺産群として世界遺産に登録された「座喜味城跡」



沖縄県

読谷村

よ み た ん そ ん



読谷村の概要と観光資源

読谷村は、沖縄本島中部の西側に位置し、東は海拔200m読谷山岳を頂点に緑の山並みが連なり、西は海拔130m座喜味城跡のある丘を頂点にカルスト台地が広がる段丘をもって東シナ海岸へ続いています。南は比謝川を境として、北は景勝の地「残波岬」に囲まれた美しい自然と豊かな伝統文化に育まれた村です。

村域は、北は恩納村、東は沖縄市、

受け継がれていく読谷人(ゆんたんざんちゅ)の誇り 歴史と伝統文化に根差したむらづくり

南は嘉手納町に隣接し、沖縄本島の幹線道路である国道58号が村内を縦断しています。那覇市から北へ約30kmに位置し、面積は35・28km²、県下で18番目の大きさです。平成26年には人口が4万人を超えて、日本一人口の多い村となりました。

読谷村といえば、紅イモを生かしたスイーツなどの特産品や東シナ海を一望できる景勝地「残波岬」、平成12年にユネスコ世界遺産(文化遺産)に登録された沖縄県最古のアーチ形石造門と琉球石灰岩の切石積みが神々しい「座喜味城跡」などの観光地が有名です。スポーツ及び宿泊施設も充実しており、プロ野球やJリーグ、パラリンピックなど様々なスポーツのキャンプ地としても多くの来訪者を迎え入れています。

また、読谷村は多くの「人材」を輩出してきました。琉球政府公選行政主席・本土復帰後の初代沖縄県知事の屋良朝苗氏をはじめ、読谷山花織の與那嶺貞氏、紅型の玉那覇有公氏、沖縄の伝統工芸であるヤチムンの金城次郎氏は卓越した技術力と高い人間性が評価され人間国宝に選ばれています。現在、読谷村にゆかりのある人間国宝

はる名にも上ります。

むらびつひつ ゆんだんぞ鳳(おおとり)

村の形は、東シナ海に突き出た半島の形状をなしており、残波岬をくちばしとして今にも大海原に飛び立たんとする鳳(おおとり)の姿に似ています。

読谷岳から多幸山をへて座喜味城にいたる山並みは、飛翔の風をはらむ羽。鳳はサンゴの花蔓を引き、海の花畑でニライカナイから来訪する嘉利吉を迎える。この嘉利吉を、座喜味グシクを頂きとする黄金環で受け止める。座喜味グシクは、風を宿す腰当、大路のカジマヤーでは、人・物・文化が結ばれる。そして西に賑わいをおき、東を肅として山裾を養い長田川の恵みを活かし、過ぎたるを流す。

村では、こうした風水の理念に基づいて21世紀に向け羽ばたく鳳(おおとり)をイメージした村づくりを進めています。

具体的には、村づくりにあたり「農業地区」「リゾート地区」「住宅地区」に分けて整備計画を進めてきました。特に農業は、村にとって重要な基幹産業という先人からの教えを頑なに守り、鳳のくちばしに見立てた残波岬一体を農業地区に指定しました。

これにより、沖縄本島中南部の西海

村民の夢と希望を抱き羽ばたく「ゆんだんぞ鳳」



岸の殆どがリゾートホテルや商業施設の埋め立て等によって変貌した中、読谷村の海岸線は、天然の珊瑚礁池が14kmも連なる貴重な自然海岸として残されています。週末になると、村内外から家族連れや若者など多くの人で残波ビーチは賑わいを見せています。

大文化芸術祭 読谷まつり

文化による村づくりは村の基本方針の一つです。平成27年で41回目を数えた「読谷まつり」は、住民参加型のイベントとして地域づくりの基礎となっています。小学生からお年寄りまで村民総出、各集落の伝統芸能を余すことなく披露し、文化による村づくりの精神を結集する場として毎年秋に開催し

ています。

石嶺村長曰く、「各集落には伝統文化が根付いています。また村民は皆一生懸命取り組み、我も我もと楽しむ気質です。読谷には芸能の素地があるんです。」なるほど、2日間で約8千人にも上る出演関係者はコミュニティ(集落)や各種団体、学校等から参加する仕組み。出演者である村民が毎年変わるの、来場者は増える一方、平成26年には40周年を記念するまつりとして3日間開催され、約11万2千人もの来場者が訪れる大規模なイベントとして賑わいを見せました。

まつりの1日目は、赤犬子琉球古典音楽大演奏会。2日目には、初の進貢使として大交易時代の幕を開けた時代の先駆者「泰期(たいき)」を乗せた

読谷まつり(進貢船)



「進貢船(しんこうせん)」の入場が行われます。トラックの荷台に進貢船の大型模型をしつらえ、中国から帰還する設定で泰期が船首に立ち、あたかも洋上を行くがごとく、まつり会場に入って来ます。それを村をあげて歓待するといふストーリー。

会場の大舞台では、各集落にそれぞれ伝わっている伝統芸能の大演奏会が賑々しく執り行われます。空手の演舞やエイサー、獅子舞、棒術などの伝統芸能のほか、現代のダンスや音楽など新旧の芸能が披露される、まさに村の一大文化芸術祭。まつりのクライマックスには、進貢船が再び中国へ出帆していくという演出で会場を練り歩き、来場者のテンションは最高潮に達します。

受け継がれていく 伝統文化

田島副村長に読谷まつりの魅力について聞いてみました。

「村内には24のコミュニティ(集落)



読谷まつり(メインステージ)

があります。それぞれの地域で伝統文化を継承していましたが、まつりのステージ（舞台）で住民がごぞつて伝統芸能を華々しく披露することによって、今までは集落単位で行われてこなかった伝統芸能が村の規模まで引き上げられ発展し、新たな文化創造の場となっています。加えて、途絶えていた芸能が復活したり、地域のエネルギーにも繋がっているんです。また、読谷まつりで披露する伝統芸能は各集落で受け継がれています。教わる子ども達が真剣なら教える大人にも力が入ります。そういう伝統も昔から今も連続と続いているので、読谷の子ども達には目上の人を敬つ心も自然と身についていくのです。」

行政はどのようにコミュニティ（集落）と向き合っているか石嶺村長に聞



石嶺村長

田島副村長



いてみました。

「読谷村の主役は、やはりその地域に住んでいる人達と伝統あるコミュニティ（集落）です。その中で行政として何が出来るか。お祭りに例えれば、ほど良い距離感を保つことによつて、住民一人一人が自律の心意気を持ち主役としてステージ（舞台）に上がり、お祭りを大いに盛り上げています。そして、集落に戻つても様々な課題等に対して自りで考え、自りで実行することを見出し、それが村全体の賑やかさにつながる。読谷村のコミュニティ（集落）にはそういうポテンシャルは元々あるし、そういうポテンシャルを引き出すことも行政の役割だと思ひます。」

読谷まつりは、実行委員会が中心となつて開催に向け準備を進めていく、

行政はあくまで裏方（サポート役）に徹します。まつり当日、村長は開会宣言の後、役場職員と共に自らも会場警備の1人として、村民を見守ることもあるといひます。まさに読谷村を象徴するエピソードです。

**手しごと 伝統工芸の継承
——ヤチムンの里——**

受け継がれているのは芸能だけではありません。人里離れた緑豊かな自然の中に赤い瓦屋根の登り窯など風情ある景色が美しい「読谷山窯（ゆんたんざがま）」は、国道58号線から少し離れた場所に昭和55年開窯しました。全国の器好きが魅せられ足繁く通つこの地域は「ヤチムン（焼き物）の里」と呼ばれています。

沖縄の方言で焼き物を意味する「ヤチムン」は、ぼつりと厚く丸みを帯びていて手に馴染みやすい形、沖縄の強い色彩に負けない濃密さをもつてダイナミックに描かれた絵付けなどから、その器に触れた人々は大らかさ、素朴さ、温かみ、癒し、などの魅力の虜になつていきます。

当時、沖縄の焼き物の中心であった那覇市壺屋は市街地化が進み、登り窯の使用が出来なくなつていました。一方、読谷村には今から約300年前とされている古窯跡があり、ヤチムンのルーツと言われる「喜名焼（きなやき）」が栄えたという歴史がありました。後に沖縄で初の人間国宝となつた

金城次郎氏（国・重要無形文化財「琉球陶器」保持者、が市街地壺屋からこの地に移転し、窯を構えていたのも時宜を得たものでした。

村では、失いかけていた沖縄伝統工芸文化継承のため返還された村有地を活用することになりました。住民や役場職員が土を運び、皆で登り窯を造ることによつて、元々嘉手納弾薬庫地区だった土地は、沖縄の焼き物文化を担うにふさわしい「ヤチムンの里」へと生まれ変わったのです。

現在、村内には60の窯元を有し伝統の技を今に伝えています。特に「ヤチムンの里」は好評で年間8万人とも9万人とも言われる観光客が訪れています。沖縄の伝統を守りつつ、今の暮



ヤチムンの里「登り窯」



ヤチムンの里 作陶に励む若者

らしに馴染む器の魅力に人々は惹きつけられているのです。

ヤチムンの里(窯元16カ所)は、登り窯に魅せられた若者達の心も掴んでいます。この里のシンボルでもある大きな登り窯は「共同」という沖縄独自の意識が機能している創作現場でもあります。里の工房では、大らかで力強い沖縄のヤチムンを生み出すため、全国各地から陶工を目指して日々作陶に励んでいる50人もの若者の姿を見ることが出来ます。また、修行を終えた陶工が、新たに若者達を呼び込むという好循環も生まれています。

このように地域の「生業(なりわい)」を継承し、地域への愛着と誇りを醸成することによって、生まれ育った地域で生き抜きたいという若者や村外

からの移住希望者等多くの人々を惹きつけているのです。また、村では読谷村陶芸研修所を開設し、ヤチムンを通して郷土学習・地域福祉・伝統工芸等の発展・後継者の育成など生涯学習の場として活用し、文化村づくりの更なる発展を目指しています。

文化による村づくり

なぜ人々は読谷村に惹き付けられるのでしょうか。村が元気な(人口が多い)理由を石嶺村長に聞いてみました。

それは「むら」にこだわった地域づくりをブレずに行ってきたからだと思います。今あるモノを一生懸命耕して、それに誇りを持つ(いう)こと。



沖縄本島最西端にある絶景スポット「残波岬」

例えば、戦後、途絶えていた伝統工芸(ハード)や伝統芸能(ソフト)など地域の宝(文化)を掘り起こしたり、復興させたり。自分達の文化に誇りを持つと、ウチナーグチ(琉球方言)もどんな使おう、三線も学校教育の課外活動に取り入れようと、文化による村づくりを推進してきました。

以前は、若者を中心に村より町、町より市の方が良いという意識の時期もありましたけど、今では、『読谷は「むら」だけどこかいいね』というのが全ての村民の共通認識になってきている気がします。

村長のモットー「知産地笑」

「知産地笑」は石嶺村長のモットーです。行政だけではなく地域、企業、放送局、大学、各種団体と一緒に知恵を出し合い、もの(人材、商品、課題解決方法等)を「産」み出すことで『地』元が盛り上がり、『笑』顔あふれる地域を目指して村づくりに取り組もうというものです。

大切なのは住んでいる人たちが自分の地域にいかにかを誇っているかということです。自信や誇りを持っているからこそ、村の魅力に惹き付けられて訪れる人々を温かく受け入れ、一緒に元気づけながら村をつくっていくことが出来るのです。

役場の4階にある展望塔から辺りを見渡すと広大な先進農業集団地区や6



石嶺村長と村の子どもたち

次産業化の拠点となる「地域振興センター」が目に入る。偶然、役場を訪れていた地元のおじいとおばあ会話に届いてきました。「ここが日本の村だよ」皆さん自分の住んでいる地域に誇りを持っているんですね。

村長さんたちの「想い」は、村民にとって自信と勇気、夢と誇りであり日々の生活の中に脈々として活き、様々な村づくりの実践の中で発揮されているのではないだろうか。そしてその「想い」は、「おじいおばあ」から、「わらびんちゃん(息子や娘)」にして「つまがんちゃん(孫達)」へと紡ぎながら受け継がれていく。

全国町村会 田中 隆三

(平成27年4月20日付第2917号)

町村の施策事例集 V 完全保存版
「魅力ある町村を実現するための様々な取り組み」

平成28年9月発行

編集・発行 全国町村会
〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-35
全国町村会館

町村の施策 事例集



完全
保存版



移住・定住・交流人口促進、
地域コミュニティ・産官学金労言等との協働

教育・伝統文化・スポーツ、
少子・高齢化対策、子育て・医療・健康福祉

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進

自然環境対策、災害防災対策・危機管理、
再生可能エネルギー

観光振興、体験型ツーリズム、
イベント(ご当地フェスタ)・環境・遺産(世界・日本)

町村独自のまちづくり施策